

「ワーク・ライフ・バランス」社会への提案 ― 求められる柔軟な働き方

たけいし え み こ
武石 恵美子

「ワーク・ライフ・バランス」＝仕事と生活の調和はいつの時代も個人にとって重要であったはずだが、今改めて注目されている。現状では、個人にとって「働き方」の選択肢は極めて限定的であり、この働き方の制約がさまざまな歪みをもたらしている。女性の低い労働力率、30代・40代男性の長時間労働、いわゆる正社員以外の人たちの低い労働条件やフリーター問題。社会的な課題の多くに、「働き方」が大きくかかわっていることが、ワーク・ライフ・バランスへの注目が高まっている背景にある。

ワーク・ライフ・バランスの「ライフ」にはさまざまな要素が含まれる。働く人には、ファミリー・ライフのほかにも趣味や学習、地域活動などの多様な生活シーンがある。仕事と生活のバランスは個人の価値観やライフスタイルによって多様であり、同じ個人でも置かれた状況やライフステージによって変動する。したがって、ワーク・ライフ・バランスは、個人が自分自身の生活をどう設計するのかということを主体的に考えることから始まり、さらにそこに時間軸を取り込んでどのような人生を送るか、というライフデザインが必要となる。自分の生活、そして人生の優先順位を決め、そこで働き方を選択することがワーク・ライフ・バランスの出発点となる。

それを実現するためには、企業そして社会における条件整備が不可欠である。個人によって多様な「バランス」を実現するためには、状況に応じた柔軟な働き方の提供が求められる。こうしたことに企業が取り組むことは組織の活力を削ぐと考えられてきたが、実は長期的には人材戦略として有効であることが明らかになってきた。企業の雇用戦略として、ワーク・ライフ・バランスの意義を考えるとときである。

■プロフィール 法政大学キャリアデザイン学部教授。厚生労働省、ニッセイ基礎研究所、東京大学社会科学研究所等を経て2006年4月から法政大学。博士（社会科学）。専門は人的資源管理、女性労働論。最近の公的活動として、働き方を変える、日本を変える行動指針策定作業部会委員、仕事と生活の調和に関する専門調査会委員（共に内閣府）等。著書に、『男性の育児休業』（共著、中公新書）、『雇用システムと女性のキャリア』（勁草書房）など多数。